

中学生・高校生向け『写真付き教材』①

東日本大震災を体験した生徒たちの思い・考え

— 2011年～2021年までの記録 —

2026年【インド洋大津波と東日本大震災の比較】版 (全15編)

1 はじめに

東日本大震災が発生した2011年から2021年まで、被災地域にある5つの高校(宮古、久慈東、山田、岩泉、宮古北)において、インドネシアのアチェ州取材したうえで『インド洋大津波と東日本大震災の比較』というタイトルで、防災・減災や復興、国際理解、環境問題等について情報を提供する授業やプリント学習を実施してきました。その中には、震災当時高校2年生だった生徒から保育園年長だった幼児まで(12学年分)の生徒達の震災時や震災復旧・復興時の思いや考えが、授業の内容をふまえた600字の小論文という形で多数記録されています。

今回、中学生・高校生向け『写真付き教材』①【インド洋大津波と東日本大震災の比較】版(15編)を作成しました。1編ずつに写真が付いていることにより、『インド洋大津波(2004年発災)』や『東日本大震災(2011年発災)』等について、被災者である生徒達の思いや考え・感情などがイメージしやすくなると思います。

また、地名や読み方が複数ある漢字等に「ふりがな」を付けたことで、『朗読』しやすくなっています。

『インド洋大津波』関連の写真の例



『東日本大震災』関連の写真の例



被災当時の状況を描いた絵
(百数十年前の大津波の伝承や教育がなかった)



【バンダ・アチェ市「津波博物館」蔵】

高台移転(海沿いの低地は水田に)
(明治と昭和の三陸大津波で被害が大きかった大船渡市吉浜)



海側

今後、東日本大震災発生当時、生まれていなかった子供達が中学・高校へ入学してきます。そのような子ども達はもちろん、震災を体験した方々にも体験していない方々にも、「地域に根ざした防災・減災」等について伝え・考えてもらうための一つの方法として、この資料が活用できると考えます。

2 利用法

・実践例1 (50分コース)

- (1) 掲載されている中から9編を選び、配布する(「導入」を含め、約5分)。
- (2) 生徒もしくは教員が、配布した9編の小論文を『朗読』する(約20分)。
- (3) 9編の中から1つの小論文を選んだうえで、以下の課題について簡単に書き出す(約10分)。(別紙資料1『学校用』)

A : あなたが共感したのは、どういう所ですか？

B : あなたが選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？

- (4) 別紙資料1を参考にして、以下の課題を提出させる(約15分)(別紙資料2『原稿用紙』)。または、宿題として後日提出とする。

A : (160字以上～200字以内で述べなさい。)

B : (260字以上～300字以内で述べなさい。)

- (5) 後日、提出された小論文のうちのいくつかを、選んだ小論文と一緒に掲載したプリントを作成・配布し、参加生徒全員で想いや考えを共有する。

・実践例 2 (50分×2コース)

- (1) 震災学習や防災学習などの情報を提供 (約30分)。
- (2) 掲載されている中から **9編を選び**、配布する (約5分)。
- (3) 参加者 (生徒等) もしくは開催者 (教員等) が、配布した **9編の小論文を『朗読』**する (約20分)。
- (4) 9編の中から **1つの小論文を選んだうえで**、実践例1の(3)と同じ課題について簡単に書き出す (約10分)。(別紙資料1)
- (5) 選んだ小論文ごと、もしくは合併で**数人の班を作り、『グループ討議資料』(別紙資料3)に沿って話し合い、各班ごとに発表する**(班分け:約5分、グループ討議・発表:約30分)。
- (5′) または、**別紙資料2『原稿用紙』**に記述(約35分)、提出後、**実践例1**の(5)と同様に参加者で**想いや考えを共有**する。
- (5″) または、小論文中の語句や『いわて震災津波アーカイブ～希望～』等を参考に、**ネットを使い「調べ学習」**を各自、あるいは班で行い、**後日発表**する。(50分×4コース)

実施上の留意点

- 1 **心を込めて「朗読」するのは**、中学生や高校生、または大学生等の**若い世代が望ましい**。しかし、状況によっては教員等による朗読でもよいし、黙読でもよい。また、**別紙資料2『原稿用紙』**での提出は、長期休業中の課題としてもよい。
- 2 **小論文1編の朗読に要する時間は**、おおよそ**1分40秒**である。(朗読の前後に必要な時間を加味すると、1編=約2分。)
- 3 **朗読する小論文の数は**、**9～15編が適当**であるので、「導入」や「グループ討議」等に必要な時間を考慮して数を決める。
- 4 **「グループ討議」と『原稿用紙』による「課題の提出」の両方を実施することが望ましいが**、片方だけの実施でもよい。

— 2011年～2021年までの記録 —

2026年【インド洋大津波と東日本大震災の比較】版 (全15編)

～被災地域の高校生（宮古高校、山田高校、久慈東高校、岩泉高校、宮古北高校）の想い・考え～

実施年度（実施した高校名）

『題名』 番号) (内容の分類) 『体験』：被災体験と伝承
『支援』：支援活動・国際交流
『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災
『生き方』：これから私ができること

平成23～26年度（宮古高校）

『私が考える（できる）国際協力や支援活動』 01) 体験・支援・環境・生き方
『私が考える（できる）マングローブの保護』 02) 体験・支援・環境・生き方
『3.11から三年目の今、私ができること』 03) 体験・支援・環境・生き方
『3.11から三年目の今、私ができること』 04) 体験・支援・環境・生き方
『3.11から四年目の今、私ができること』 05) 体験・支援・環境・生き方
『地球環境の保全と日本の役割』 06) 体験・支援・環境・生き方
『東日本大震災を後世に伝える方法』 07) 体験・支援・環境・生き方
『東日本大震災を後世に伝える方法』 08) 体験・支援・環境・生き方

平成28～30年度（山田高校）

『3.11から5年を経た今、私ができること』 09) 体験・支援・環境・生き方
『3.11から5年を経た今、私ができること』 10) 体験・支援・環境・生き方

『東日本大震災から7年目の今、

私ができること』 11) 体験・支援・環境・**生き方**

『身近な自然環境を活用した防災・減災』

12) 体験・支援・**環境**・生き方

『インド洋大津波や東日本大震災を

後世に伝える方法』 13) 体験・**支援**・環境・**生き方**

令和2年度（宮古北高校）

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 14) 体験・**支援**・環境・**生き方**

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 15) 体験・**支援**・環境・**生き方**

※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

01) 【宮古市・（宮古高校）2年生】 平成23年度・宮古高校3年 Sさん

『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私が考える国際協力とは、ただ物資を送るということではないと思う。お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力なのではないかと考える。

今、世界では紛争が起きていたり、飢餓で苦しむ人がいたりとたくさんの問題を抱えている。そして、3月11日に東日本大震災が起き、支援が必要な人が大勢いる。大震災を経験し、人の命の尊さ、今までの自分の生活がどれだけ贅沢だったかなど様々なことを考えさせられた。中でも強く思ったことは、協力し合うことの大切さだ。避難所にボランティアに行ったおり、外国のボランティア団体も多く見かけた。その中の1人がおばあさんの肩をもみ「僕らがいるよ」と片言で話しかけていた。そしておばあさんが「力になりたいって思ってくれることが一番うれしいよ」と言っていた。私はその通りだと思った。確かに、物資の支援がとても大切で、物資がないと生きていけない人もたくさんいると思う。でも、力になりたい、助けたいと思うことが支援される側も一番嬉しいと思うし、その気持ちが一番大切なことだと思う。力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていくので、その気持ちを持つことが大切だ。

世界には、まだまだ知らない問題があると思う。私は問題を知り、理解することから支援につなげていきたいと思う。

防潮堤を越えた津波(宮古市)



【出典:いわて震災津波アーカイブ/提供者:宮古市】

宮古市の避難所



【出典:いわて震災津波アーカイブ/提供者:宮古市】

※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

02) 【宮古市・（宮古高校）1年生】 平成23年度・宮古高校2年 Sさん

『私が考える(できる)マングローブの保護』

マングローブとは、海水と淡水が入り交じる河口・沿岸に生育する植物群の総称である。また、マングローブは他の生物が生活できるような適度な環境を提供してくれていると同時に、台風等の暴風雨や高波・潮風から土壌や陸上生物を守っている。実際に2004年のスマトラ島沖地震で20数万人が亡くなったのは、津波防止に役立つ海辺のマングローブ林が日本向けエビ養殖のために伐採されたことが大きいと報道されていたのを覚えている。

天ぷらやお寿司など、日本人はエビを食べる機会が多い。調べたところ、その証拠に日本のエビの輸入量は世界第2位で、第1位のアメリカと合わせた二国で世界のエビの消費量の約7割を占めている。日本でマングローブは奄美大島以南にしか生息しないことから、マングローブ林の減少問題についてあまり意識されていない。しかし、上で述べたことから、私達はこの問題を無視することはできない。いわば日本人の欲望のために環境が破壊されているからだ。

解決策は、日本やアメリカが消費量・輸入量を減らせばよいという単純な問題ではない。エビの生産で生計を立てている人々に大きな経済的打撃を与えるからである。経済効率が悪くても、環境負荷の少ない養殖法への転換を進めていくことこそが今後の課題なのではないか、と私は考える。

マングローブ林伐採後の集約型エビ養殖池
(大量のエサ、薬剤等により水質悪化→数年で廃棄)



植林されたマングローブ植物(アチエ州)



※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

03) 【山田町・（豊間根中学校）1年生】 平成25年度・宮古高校1年 Sさん

『3. 11から三年目の今、私ができること』

現在、私達がすべき復興への手助けは、一番はまず「伝える」ことだと思う。アチェの地にある『津波博物館』や、『ノアの方舟』で助かったガヤさんの語り部としての活動のように、後世に残せる形で伝えていかななくてはならないと思う。私は中学3年生の時、近い将来に大地震や大津波が来ると言われている和歌山県に、被災地の学校の代表の一人として講話をしに行ったことがあるが、やはり私達が身をもって痛感した悲しみや辛さ、震災への備え方は、できるだけ広める必要があると思う。

二番目は、「切り換える」ことだと思う。アチェの人々は、大災害を神様の試練として受け止め、プラス思考で前に進んでいる。「日常への感謝」や「たくさんの人との出会い」は、あの災害があったからこそ在るのである。命や大切なものもたくさん奪われたが、得たものも少なくはない。

そして、三番目、「返す」ことにつなげることが必要なのだ。「今までの分」「これからの分」、私達が大災害を経験し、学んだこと、活かしたこと、失敗したことなど、全てを他の人の役に立つように使い、恩を返すのだ。

資料を読んで、文化は違っても「思いやり」や「助け合い」の精神は、どこにでも同じく存在していることを知った。文化や国境を越えた思いやりや助け合いの輪は、無限に広がると思う。そしてそれは今、私達がやらなくてははいけないし、私達が広げていくべきだと考える。

被災体験を語るガヤさん(22才)



【バンダ・アチェ市『津波博物館』】

2階に乗り上げた被災当時の「ノアの方舟」の写真



【バンダ・アチェ市】

※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

04) 【宮古市・（^{たろう}田老第一中学校）2年生】 平成25年度・宮古高校2年 Nさん

『3. 1 1^{さんてんいちいち}から三年目の今、私ができること』

私は3. 1 1^{さんてんいちいち}の東日本大震災^{だい}を実際に経験したし、実際に目にしました。その津波があつてから3年目の今^{いま}、私ができることは2つあると思います。

1つ目は、後世^{こうせい}に伝えていくことです。私達は本当に辛い経験^{つら}をしました。しかし、これが最後という訳ではありません。津波や大地震は、何年、何十年、何百年後かにはまた起こるものです。もしかしたら、東日本大震災よりもひどい震災^{しんさい}になるかも知れません。次の震災でたくさんの人の命^{うしな}を失わないためにも、このことを語り継ぐべきです。大人^{おとな}たちが語るより、私達若者が経験したことを話す^{ほう}方が、これからの人たちにはタメになるのではないかと思います。本当にあったことを話すのは正直^{つら}辛い部分もありますが、全て^{すべ}を話すべきです。

2つ目は、3. 1 1^{さんてんいちいち}の大震災^{だい}の反省をもとに、これからの街作りや防災対策について考えていくことです。これから将来、街などを復興^{ふっこう}・発展させていくのは私達です。その私達が、今からそういうことを考えていくべきです。どんな街^{まち}にすればたくさんの命が救^{すく}われるのか、どんなことをすれば多くの人^{ひと}が避難できるのか、それを考えるのはこれからの未来^{みな}を担^{かか}う私達だと思っています。

3年前の震災で、たくさんの辛い^{つら}ことや反省があると思います。それを語り継ぎ、考えていくことが、私達ができることであり、私達の役割^{やくわり}なのだと思います。

津波による被災状況(宮古市田老)



【出典:いわて震災津波アーカイブ/提供者:宮古市】

低地は野球場等に、住宅地は高台に(宮古市田老)



※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

05) 【大槌町・（吉里吉里中学校）2年生】 平成26年度・宮古高校3年 Kさん

『3.11から四年目の今、私ができること』

東日本大震災から今日まで、様々な節目で「今の自分にできること」を考えました。その末に辿り着いたのは、「今を一生懸命生きる」ということです。具体性がない、と言われるかもしれませんが、私はこれが「今の自分にできること」であり、「やらなければいけないこと」だと思います。

震災で私たちは多くのものを失いました。未だに戻ってこないものも沢山あります。「明日やろう」と思っていたことができなくなりました。「当たり前だ」と思っていたことの大切さに気がつきました。今、生きているということが、どれだけ恵まれているのかを感じました。それゆえ、私たちは何をするにせよ、この一瞬一瞬を全力で生きていかなければならないのです。震災により命を落としてしまった方々の分も、有意義な人生を送らなければなりません。

私たちが今を懸命に生きることは、将来の社会貢献にもつながります。震災での経験を活かし、未来を創り上げることができるのは私たちです。しかし、「一生懸命」というのは決して簡単なことではありません。辛いときも疲れてしまうときもあると思います。そういう時こそ、東日本大震災を振り返り、忘れないようにすることが大切だと思います。

震災前、当日、直後、全てを知っている私たちだからこそ創り上げることのできる未来を、一生懸命築いていきたいと思います。復興に役立つ人間に成長していきたいです。



※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

06) 【山田町・（山田中学校）1年生】 平成26年度・宮古高校2年 Hさん

『地球環境の保全と日本の役割』

環境問題通信^{つうしん}を読んで、改めて^{あらた}防災の大切さや役割を考えさせられた。ただ災害から直接的な被害を受けないようにするだけではなく、地球環境^{かんきょう}や人命^{じんめい}を守ることを長い目で見て考えていく必要^{ひつよう}があると思いました。

アチェでは、マングローブを植^うえて津波から守ると共に地球環境の保護^{おこな}も行っています。そのマングローブの減少は、私たち日本人に大きく関わ^{かか}っていることを知りました。ただ闇雲^{やみくも}に植林^{しょくりん}するのではなく、木の性質や植林^ご後の環境がどうなるのかなども考えて作業しなければなりません。また、日本にも防災林^{ぼうさいりん}があることを知りました。保安林には種類があり、一つ一つの役割が異^{こと}なるので驚きました。防災林は守るだけではなく、環境を豊かにしたり、津波に対して一定^{いっせい}の効果があることも学びました。コンクリートで固めた堤防^{ていぼう}でなくても、環境を守りつつ人命も守る防災林でも良いのかな、と感じました。

これからの日本は、日本にしかできない災害対策^{たいさく}をする必要があると思います。例えば、その地域の環境に合った防災林や、時には堤防^{ていぼう}をつくることです。海岸に植林^{しょくりん}する樹木^{じゅもく}の性質やその木の管理^きのしやすさ、普代村^{ふだいむら}のような大きな水門^{すいもん}など、その土地やその土地の人の生活にも合う形^{かたち}で防災することが大切だと思います。そしてその一つ一つの小さなことから、地球の環境を少しずつでも良くして環境保全^{ほぜん}にも役だっていけたら良いと思います。

手前は再生途上のマングローブ林



【バンダ・アチェ市(被災後8年目)】

普代水門の陸側の防災林(右に小学校)
(水門(人工物) + 防災林(自然)で防災・減災)



※【震災当時の居住地・(所属)学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

07) 【山田町・(山田中入学前)小学6年生】 平成26年度・宮古高校1年 Sさん

『東日本大震災を後世に伝える方法』

インドネシアのスマトラ沖地震大津波でのシムル島の被害者数は7人。これは偶然や奇跡などではなく、そこにはこれまでに後世に伝えようと努力をしてきた先人たちの思いがあったからに違いないと私は思います。ただ語り継ぐだけではなく、歌や踊りなど身近な事に託すことで、将来に伝わっていくことを大切に考えたのだと思います。インドネシアでは、津波とは神が怒って起こしたものと考える人々が数多くおり、歌や踊りが人々に親しまれやすかったのだと思います。

日本では、津波を良くないもの、暗いものと考えています。津波というと、人々は思い出したくない、悲しい、辛いと思います。しかし、それらを乗り越え、意識を変えてゆかなければ、何度も同じことをくり返し、悲しむ人々が増えていきます。それを防ぐためにも、語り継ぐということ、伝承するということは大切です。それは、たくさんの人ではなくても、子どもや孫、友達など、できる範囲で少しずつからでもできます。恐ろしさを伝えていくことは、被害を受けた私たちだからこそできる使命だと感じます。私たちが体験したからこそ、私たちにしか伝えられないものが山ほどあると思います。

建物を巡って、映像を見るだけでは大切なことが十分に伝わりません。私はぜひ、語り継ぐということ、伝承するということを始めたいこうと思いました。二度と、たくさんの方が大切なものをなくさないように。



シムル島の伝承歌謡(短く、覚えやすい)

村の人たちはパニックになります。
津波が起こることが心配です。
でも(今では)村の人たちはどこに
避難するかを既にわかっています。
タンゴ・バシにあるシバウ山です。

【立教大学アジア地域研究所特任研究員の高藤洋子さん提供を改変】

※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

08) 【宮古市・（^{くわがさき}鍬ヶ崎小学校）6年生】 平成26年度・宮古高校1年 Yさん

『東日本大震災を後世に伝える方法』

私が東日本大震災を後世に伝える方法として最適だと思うのは、シムル島で歌われている「スモン」のように、親しみやすい方法で伝えることだと思います。「スモン」は、韻を踏んだり、リズムカルなので、子どもでも分かりやすくなっています。そして、歌うことによって覚えやすくなっています。歌詞も明るく、避難するときに役立つものが多いです。後世に伝えるべき事は、「津波の恐さ」だけではなく、「どのようにして逃げるか」だと思います。

伝えるためには、歌をつくる他にも、「紙芝居」や「絵本」、「かるた」など、子どもの遊びを取り入れるのが良いと思います。そうすることで、小さい頃から遊びながら津波に対する知識をつけることができます。私が卒業した小学校では、実際に「津波防災かるた」というものがありました。その「津波防災かるた」は卒業生が作ったもので、小学生でも分かりやすくて、内容も面白いものが多かったです。こういったものを、もっとたくさん作って、幅広い世代の人達に楽しみながら覚えてもらえれば、もっと後世に伝えやすくなるのではないかと思います。

震災から時間が経てば経つほど、人の記憶から忘れられてしまうので、後からみても分かるように、形にして残すのが最もいい方法ではないかと思います。

Smong(スモン)を歌う村人(シムル島)



【立教大学アジア地域研究所特任研究員の高藤洋子さん提供】

韻(いん)を踏んだ美しい詩歌

Smong (シムル語)

Sumengen bano mangida linon

Huru hara ata bak kampong

Malaut ata mangida smong

Bakdo nga tantu bano kumodong

【立教大学アジア地域研究所特任研究員の高藤洋子さん提供を改変】

※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

09) 【山田町・（山田南小学校）6年生】 平成28年度・山田高校3年 Yさん

『3. 11から5年を経た今、私ができること』

震災当時、私はまだ幼かった。町では煙があちこちから立ちのぼり、店や家などは跡形もなく崩れ、本来の山田町の姿ではなくなっていた。また、私はこの震災で母を亡くし、前に進むこともできないままとなった。そんな時、私を支え、励ましてくれたのが、家族、友人、他の県の方々、そして外国からの支援だ。

たくさんの方々から支援され、その中で一番心に残っているものは、手紙だ。手紙には励ましの言葉などが書かれており、そのおかげで辛く苦しい日々を乗り越えることができた。また、地域の方々ともお互いに支え合いながら過ごすこともできた。

震災から五年が経ち、私は今、高校3年生となった。この五年間は、長いようで短い日々でもあった。そして、私がこの五年間で一番学んだことがある。それは、人の大切さだ。私は、もともと人見知りで、人となかなか接することができなかった。しかし、多くの方々に支えられていると気づき、そこから私も恩返しのために多くの方々に助けたいと思い、一年生から三年生まで、町で行われているボランティア活動に積極的に参加した。ボランティア活動に参加したことによって、子供からお年寄りまで幅広い年代の方と接することができ、人と接することが好きになった。

元の山田町に戻ることはまだ時間がかかるけど、復興することを信じ、人のために生きていきたいと思う。

津波の後、火災発生(山田町)



【出典:いわて震災津波アーカイブ/提供者:山田町】

山田高校生徒会の活動



【出典:いわて震災津波アーカイブ/提供者:山田町社会福祉協議会】

※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

10) 【山田町・（山田南小学校）6年生】 平成28年度・山田高校3年 Aさん

『3.11から5年を経た今、私ができること』

私は、東日本大震災を経験して5年を経た今、日本の自然災害に対する意識を変えるために経験者である私たちが行動を起こしていくことが必要だと思う。これは、私たちにしかできないことであり、多くの人々の心を動かすために最も重要なことであると思う。

インド洋大津波で大きな被害を受けたアチェでは、ほとんどの地域で地震の後に津波があるという伝承や教育がなかったという。そのために約16万人の方々が命を落としてしまった。それに比べて、日本ではそのような伝承・教育はされていたはずである。しかし、なぜ東日本大震災では、多くの犠牲者が出てしまったのだろうか。

あの時を振り返ると、町の人々の様子が浮かんでくる。恐怖と困惑でざわついていた。その様子から、誰もがあんな巨大な津波が来るとは想定できなかったのだと思う。防災に対する一人一人の意識が低かったのだ。これからの日本の防災について考える時に、経験者が未経験者に震災のことを伝えていく場を増やす必要がある。語り部の活動があったとしても、それが全国へと広がらなければ、日本全体の防災につながらない。また、アチェで語り部をしている人の活動から分かるように、経験者が話す言葉にはとても重みがある。それほど説得力があり、人々の心を動かすことができるのだ。私たちの経験を伝えていくことが、風化を防ぎ、そして日本人一人一人の防災意識を高めるきっかけになるのだ。



※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

11) 【山田町・（大沢小学校）5年生】 平成29年度・山田高校3年 Hさん

『東日本大震災から7年目の今、私ができること』

東日本大震災から7年目になる今、私ができることは山田町にとどまることです。

私は7年前の3月11日の午後、学校で授業を受けていました。その授業が終わって掃除をして帰りの会をすれば、いつも通りに帰るはずでした。しかし、授業中に大きな地震があって先生達からの指示に従って校庭に避難しました。その時の私は授業がなくなってラッキー、ぐらいにしか思いませんでした。その当時の私は大津波と地震の恐ろしさを知らなかったので、避難が終わったら帰るつもりでいました。

しかし、ここから恐ろしいことが起きました。学校の校庭の下の方から今まで聞いた事がない大きな音がしてきました。私は気になって校庭のフェンス越しから見ました。そして、私は一気に青ざめました。山田町が大きな波に呑まれていて、家や車や人などが流れていました。さらに学校の校門には必死に津波から逃げてきた人がいたり、あまりの辛さに泣き崩れている人がいました。その後私は家に帰ることができず、学校で避難所生活を送っていました。そんな中でも地域の人達は、当時小学生だった私達のために食べ物を集めてきてくれたり、生活に必要な水を持ってきてくれました。その地域の方々のおかげで、私は今年で十八歳になりました。

その人達に恩返しをするために、私は山田町に残り、ずっと頑張りを続けていくことが、私にできる事だと思います。

大津波に襲われた「山田北小学校」等



【出典：いわて震災津波アーカイブ/提供者：山田町】

山田町の避難所



【出典：いわて震災津波アーカイブ/提供者：山田町】

※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

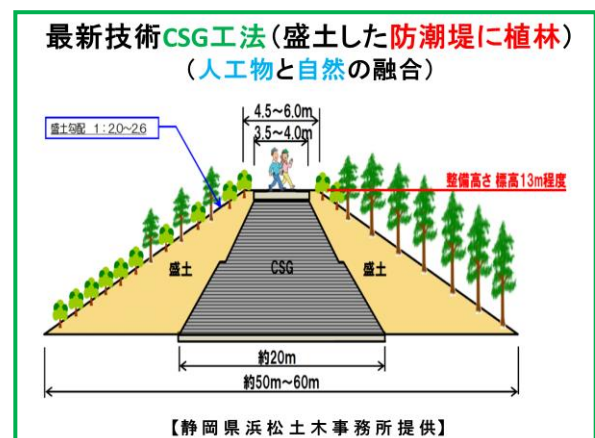
12) 【山田町・（船越小学校）4年生】 平成30年度・山田高校3年 Oさん

『身近な自然環境を活用した防災・減災』

私は自然環境を活用するということで、山田の地形を活かした建物を造り、避難できる場所の整備が必要だと考えます。まず、山田は平地が少なく、山が多いです。その特徴を活かしてより高台への住宅再建が可能です。その為には山を切り崩さなければなりません。山が減れば反対する人達がいるかもしれませんが、その山を崩して出た土を海側の誰も住まない所に持ってきて、新たな苗や木を植えれば良いと考えます。

また、誰もが行ける高台の見晴らしの良い所に公園や広場を造ることができれば良いと思います。私が実際に小4の時に経験した津波では、高台に上がる所が無く、ただの山の中を1～6年生まで泥まみれになりながらも駆け上がったのを覚えています。その時、後方から波がすぐ近くまで来ていて、電柱や家も自分達の方へ勢いよく流れてきました。そんなことがないように、誰でもすぐ上がれる広場があるといいです。また、小学校から家へ帰る時に松林を通して帰っていましたが、海沿いにすぐ松林があったおかげで助かった家も船越地区では多いと思います。

なので、山を崩した後の土や木は、海側に持ってきて盛り土をし、さらに松林のような自然環境を造ることが必要だと思います。防潮堤だけでは守り切れないところを林が守り、さらに家が高台にあることで、少しでも被害者や被災する建物などを減らすことができると思います。



※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

13) 【山田町・（船越小学校）4年生】 平成30年度・山田高校3年 Sさん

『インド洋大津波や東日本大震災を後世に伝える方法』

2018年は、記録的な気象現象や地震によって災害が相次ぎ、西日本豪雨や大阪北部地震・北海道胆振東部地震など、自然災害が多かった年でした。八年前私達は大きな地震を体験し、地震後さらに恐ろしい津波の被害を受けました。

『生物』の授業では、インド洋大津波と東日本大震災の比較について、小笠原先生が実際に被災地を訪れ、見たものや感じたものを教えて頂きました。インド洋大津波と東日本大震災で共通しているのは、やはり伝承を後世に残す重要性です。インドネシアでは、津波のことを忘れないように工夫が施されていきました。たとえば、津波のことを伝承歌謡にし、韻を踏み覚えやすくすることで、幅広い年齢の方々に親しみやすくし、歌い継ぐことで後世に伝承することが可能になっていきました。また、日本で見たことがなかったのは、津波博物館でした。その博物館には写真はもちろん、津波を経験した方から直接話を聴けるスペースがあり、多くの人に知ってもらうことが可能でした。また、津波を経験した人の記憶も、風化することがなくなるのではないかと思います。

ですので、私は、「歌」や「博物館」の二つの方法を用いることで、東日本大震災を後世に残せると考えました。そして、震災を経験した私達は、「伝える」ことを大切にし、いろいろな工夫を加えながら積極的に活動していくべきだと強く思いました。



※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

14) 【宮古市・（^{たろう}田老第一小学校）2年生】 令和2年度・宮古北^{きた}高校3年 Tさん

『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

私は、小学校2年生の時に東日本大震災に^{だい}遭^あいました。それからもう10年が経ちます。あの時の私は逃げることに精一杯で他の人のことなんて考える余裕はありませんでした。ですが、あの日から10年。町も^{ふっこう}復興したり、発展している中で私にできることは、^{ふた}2つあると思います。

一つ目は、^{こうせい}後世に伝えていくことです。アチェの人達も^{しんさい}震災の記録を残そうとしているように、私達も震災について記録し、語り手として内陸の人や津波を知らない世代の人に伝えていかなければいけないと思います。もし、津波の^{でんしょう}伝承や教育がなければ大きな被害が出るのは目に見えています。だからこそ、少しの事でも伝えることが必要です。

二つ目は、自分達のことを思ってくれている人が必ずいることを知ることです。^{しんさい}震災を経験した私は、^{まわ}周りの人や日本人しか心配してくれていないと思っていましたが、授業で「^{おもいやり}OMOIYARIのうた」を聞いた時に、日本だけではなく世界の人が自分達のことを思ってくれていたことを知りました。その時には気がつくことのできなかった^{きさ}支える力があることを知ることができました。

私は、震災の時の記憶が^{うす}薄れつつあります。それでも、^{わす}忘れないように時々考えながら生活しています。10年経った今の自分なら、あの日のことをもっと上手く説明できるかもしれません。伝えること、^{しえんしゃ}支援者のことを知ること。これは、今後も必要だと思います。

「OMOIYARIのうた」を歌うアチェの高校生
(毎年、3月11日に日本語を学ぶ人達などが歌ってくれている)



宮古市田老の「学ぶ防災」

(津波が乗り越えた防潮堤の上で、解説)
(「たろう観光ホテル」6階で、ビデオ上映)



※【震災当時の居住地・（所属）学年】 在籍年度・高校名・学年、氏名のイニシャル
『題名』

15) 【宮古市・（保育所年長）5歳】 令和2年度・宮古北^{きた}高校1年 Hさん

『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

3月11日。あの日からもう10年が経^たとうとしています。私には何ができるのだろうか。

まず、私は当時、保育所^{しよ ねんちよう}の年長^{ねんちよう}だった。保育所の記憶など忘れていくことが多いが、あの時の記憶、あの、木をなぎ倒しながら来る真^まっ黒^{くろ}い大きな波は今でも昨日のように鮮明^{せんめい}に覚えている。まだ5歳だった私にとってはショックが大きかったが、みんなの笑顔^{えがお}・元気^{げんき}・優しさ^{やさしさ}に励^{はげ}まされ、ここまでくることができた。だから私ができること^{こと}の一つ^{ひとつ}目は、辛い^{つら}時にこそ『笑顔』でいることだ。そこで私が見習^{まね}いたいのがアチェの人々だ。アチェの人々はただ頬^{ほお}を上げるだけの笑顔ではなく、思いやりの心^{こころ}からくる笑顔で、その心^{こころ}からの笑顔というところを私も大切にしていきたいと思った。

そして二つ^{ふた}目は、震災^{しんさい}の出来事^{できごと}を次の世代^{せうだい}へとつないでいくことだ。正直^{たろう}、田老^{ぼろう}は防浪^{ぼうろう}堤^{てい}があったので逃げなかった人もいたと思う。だから防浪堤^{ぼうろうてい}があるから安全・安心ではないということ、地震^{ちゆうしん}が来たら逃げる準備^{かくご}・覚悟^{かくご}をし、自分^{じぶん}第一^{だいいち}で行動^{こうどう}することを特に伝えたい。次に、このような災害^{さいがい}が起きた場合^{ばあい}、一人^{ひとり}でも多くの命^{いのち}が助かってほしいので、語り^{かた}継^ついでいくことが今の私にできることである。

心からの笑顔、そして、次の世代^{せうだい}へと語り^{かた}継^ついで風化^{ふうか}させない。この目標^{もくひょう}を日々忘れず活動^{かつどう}していきたい。

宮古市田老(2011年3月22日撮影)



【出典:いわて震災津波アーカイブ/提供者:宮古市】

「思いやりの心」と「笑顔」の地-アチェ

